様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０８５４

研究課題名（和文）韓国出土ヒスイ勾玉の集成と流通過程に関する考古学的研究

研究課題名（英文）Archeological study on corpus and distribution process of jade comma-shaped beads in the ancient Korea(3-7th century A.D.)

研究代表者
高橋　浩二（TAKAHASHI, KOJI）

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０３２２１０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：韓国の古墳および遺跡から出土した翡翠勾玉の集成的研究を行った。次に、これを基礎にして、分布の特徴を明らかにするとともに、各地における出現時期や出土数の変化を検討した。また、弥生・古墳時代の翡翠勾玉と比較して、韓国出土のものが日本列島からもたらされた可能性が高いことを指摘した。そして、これらを踏まえ、韓国出土翡翠勾玉の流通過程について3つのパターンを検討した。なお、一部の成果を1冊の報告書にまとめた。

研究成果の概要（英文）：As a result of corpus research about a jade comma-shaped beads in ancient Korea, it was showed that about 863-871 points of total excavated from 92 mounded tombs, mounded tomb groups (site), 198 burial remains. Then, I showed characteristic of distributions and examined appearance time and change of numbers in each areas. In addition, compared Korean relics with jade comma-shaped beads in the Kofun period from Yayoi period in Japan. As a result, it was showed that Korean relics were more likely to be brought from Japan. And, based on these, it was showed three patterns about the distribution process of jade comma-shaped beads in ancient Korea. And finally reported some result as a report.

研究分野：考古学

キーワード：翡翠勾玉　ヒスイ　韓半島　集成　古墳時代　流通　新羅　三国時代

１．研究開始当初の背景

韓国出土の翡翠勾玉は、新羅王陵出土の冠に多数付くものとして、古くから注目されてきた。また、近年では日本列島からの舶載品の一つとして重要視されるなど（東潮 2006『倭と加耶の国際環境』吉川弘文館、朴天秀 2007『加耶と倭－韓半島と日本列島の考古学』講談社）、再び注目されるようになってきた。

しかし、玉類の変遷や古墳副葬品を検討する中で部分的にふれられることはあっても、韓国出土の翡翠勾玉に対する個別具体的な研究はほとんど行われていないのが実状であった。わずかに崔や門田による研究（崔恩珠 1986「韓國曲玉の研究」『崇實史學』第 4 輯、崇實大学校史学会、門田誠一 1989「日本と韓国における硬玉製勾玉についての再吟味」『日本海文化研究』富山市・富山市教育委員会、同 2004「韓国古代における翡翠製勾玉の消長」『特別展 翡翠展 東洋の至宝』毎日新聞社）があるものの、古墳名と出土数を挙げるだけの集成の段階に留まっていた。また、あらためて検討してみると、一覧表から漏れているものも多く、例えば日本の古墳研究とも深く関わる釜山の福泉洞古墳群、慶山の林堂洞・造永洞古墳群、高霊の池山洞古墳群、陜川の玉田古墳群からはさらに多数の翡翠勾玉が出土していることが分かった。加えて、発掘の進展、調査報告書の刊行に伴い、資料数が大幅に増加していることも確実になってきた。

そして、これら既知の資料の見直しや新規資料の追加などを踏まえて、翡翠勾玉の分布や各地における出現時期、出土数の変化をたえず再検討することも重要な課題と言える。

さらに、韓国出土の翡翠勾玉には、日本では古墳時代中期に増加する白色不透明で鉄製穿孔具を用いる定形勾玉以外にも、古墳時代前期以前に作られた緑色透明で石製穿孔具を用いる半玦形や獣形、そして丁字頭勾玉など、さまざまな形態や質感、製作技術のものが認められる。また、古いタイプの翡翠勾玉だけで構成されるパターンと、新古両タイプが供伴するパターンの違いがみられ、このことは時期差を表すだけでなく、流通過程や通交関係の変化、政治的関係の変動をも反映しているのではないかという重要な見通しを得るに至った。

原産地・生産地の問題に関しても、一部は産地分析が行われているが、日本の糸魚川産という結果（早乙女雅博ほか 1997「日韓硬玉製勾玉の自然科学的分析」『朝鮮学報』第 162 輯、朝鮮学会、李弘鍾ほか 2008「韓半島玉類の理化学的分析と流通」『湖西地域 邑落社会の変遷』第 17 回湖西考古学会学術大会）と、全てそうとは言い切れないという結果（崔 1986 前掲）が提出されている。また、三国時代の勾玉の形態は韓半島の先史勾玉に由来するという説（西谷正 1982「朝鮮先史時代の勾玉」『森貞次郎古希記念古文化論集』上など）と、起源を先史勾玉に求めることに慎重な説（李仁淑 1987「韓国先史曲玉に関する小考」『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢 考古学篇』など）があり、解決には至っていない。

韓国出土の翡翠勾玉は、3 世紀後葉から 7 世紀頃にかけての日本列島と韓半島諸地域の勢力間における、もの・人・情報の流通や通交、政治的関係を具体的に解明する糸口になる重要な考古資料であるにもかかわらず、集成的研究が不十分で、その結果、形態や製作技術などの比較検討がほとんど進展しておらず、研究資料として十分に昇華されていないところに大きな問題があった。

なお、韓国出土資料については、糸魚川原産の「ヒスイ」の勾玉に加えて、それとよく類似した石材のものもわずかに含まれる可能性が考えられるため、これらを包摂する概念である「翡翠」の用語を統一して使用した。

２．研究の目的

このような研究の進展状況と問題点とを踏まえ、本研究では韓国出土の翡翠勾玉を集成し、分布の特徴や出現時期、出土数の変化を検討するとともに、日本の弥生時代から古墳時代のものと形態や質感、製作技術、着装形態などを比較検討することを通して、日本列島から韓半島諸地域への翡翠勾玉の流通過程を明らかにすることを目的とした。具体的には、次のような目的と計画のもとに研究を実施した。

（1）韓国出土の翡翠勾玉を集成する。

（2）韓国出土の翡翠勾玉の分布の特徴について明らかにする。それとともに、新羅や加耶、百済、栄山江流域などの地域における出現時期や出土数の変化を明らかにする。

（3）翡翠勾玉の形態、色調や透明感、穿孔方法などの製作技術、また装身具としての着装形態などに注目しながら、日本の弥生時代から古墳時代のものと比較する。

（4）上記を踏まえて、韓国出土翡翠勾玉の流通過程について総合的に評価する。

３．研究の方法

研究の目的のうち、(1) については、日本国内の研究機関、また韓国の国立中央博物館図書館が所蔵する発掘調査報告書を主に活用させていただき翡翠勾玉の集成をすすめた。集成は、埋葬施設ごとに集成票を作成し、実測図や写真、出土状況図を集めるだけでなく、翡翠勾玉の点数や着装形態をはじめ、個々の勾玉の形態や法量、色調や透明感、穿孔方法のほか、古墳や埋葬施設の規模、供伴遺物、築造時期などを記すこととした。それとともに、各地の博物館や遺跡を巡検し、既知の資料の確認や新規資料の追加を行った。また、研究協力者などの協力を得て、可能な限り写真撮影や実測などによる資料化をすすめた。

次に、集成票を基礎にして、(2) 分布図の作成をすすめた。そして、各地域における翡

翠勾玉の出土数を集計して分布の特徴について明らかにするとともに、各地における出現時期と出土数の変化などについて検討をすすめた。

（3）に関しては、研究の過程で、翡翠半玦形勾玉の重要性を再認識し、とりわけ陜川の玉田 M4 号墳出土資料に注目して再検討を行った。また、3 世紀後葉～6 世紀の期間にわたる翡翠勾玉の通時的な変化がおえる福泉洞古墳群などの資料に注目した。

そして、（4）として、以上を踏まえ、韓国出土の翡翠勾玉の流通過程について現段階における評価を行った。

このように、本研究は、韓国各地から出土した翡翠勾玉を網羅し、必要な情報とともに実測図や写真等の集成的研究を行うこと、そしてこれを基礎にして、分布の特徴と、各地における出現時期や出土数の変化を検討するとともに、日本の翡翠勾玉との比較検討を通して、流通過程の研究をすすめるところに特色がある。

４．研究成果

本研究で明らかになった成果は次のとおりである。

（1）韓国出土翡翠勾玉の集成的研究

報告書等での確認がとれていない少数の資料を除き、現段階において古墳群（遺跡）数 92 箇所、埋葬施設（遺構）数 198 基の、合計約 863～871 点（不確実な資料を含む）の集成票を完成させた。

研究期間中には、研究協力者の朴天秀氏らが別の研究の中で、新羅・加耶古墳出土資料の一覧表を提示したが（朴天秀・林東美 2013「新羅・加耶の玉－硬玉製曲玉を中心にして－」『韓国先史・古代の玉文化研究』福泉博物館）、古墳名と出土数等を挙げるだけに留まり、また忠清道と全羅道は対象から外されている。本研究は、慶尚道だけでなく、忠清道や全羅道も対象とし、かつ実測図や写真等も網羅した、はじめての本格的な集成と言えるものであり、韓国出土翡翠勾玉に対する基礎研究としてきわめて重要な意義をもつ。

これらの成果のうち、慶尚道出土資料については頁数が膨大で予算的な問題もあり、報告書を刊行するには至らなかったが、忠清道と全羅道出土資料については、５．主な発表論文等で記すように、『韓半島出土翡翠勾玉集成－忠清道・全羅道編－』を作成し、刊行した。前掲の朴天秀・林東美 2013、また髙橋浩二 2012『韓半島出土翡翠勾玉集成－釜山・金海編－』と合わせれば、韓国出土のほぼすべての翡翠勾玉について出土古墳と点数が把握できることになり、きわめて重要な成果と言える。

（2）分布の特徴と出現時期、出土数の変化について

図１のように、忠清道・全羅道出土資料の分布図を作成し、公表した。まず、出土数は

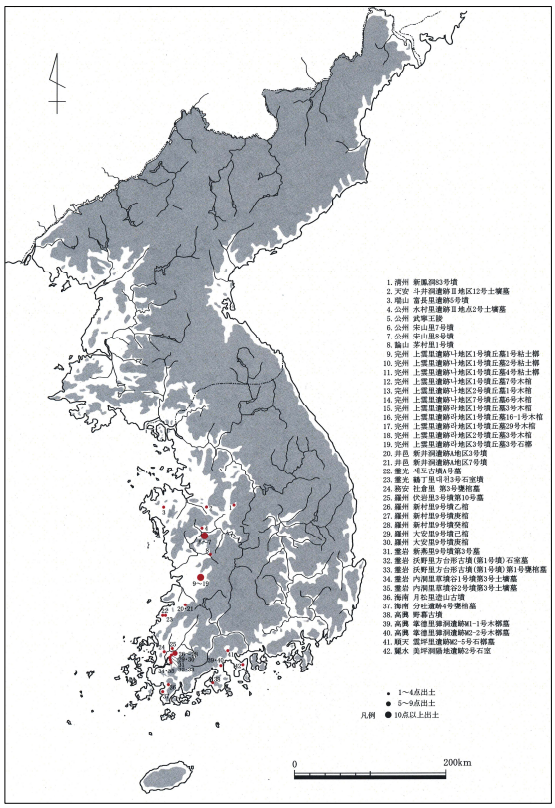

図１　忠清道・全羅道出土翡翠勾玉分布図

少ないが、麗水から海南にかけての南海岸沿いに翡翠勾玉が分布していることが分かる。最北の出土地は、清州の新鳳洞 83 号墳や天安の斗井洞遺跡、瑞山の富長里遺跡である。また、栄山江流域の羅州に比較的集中する他、とりわけ完州の上雲里遺跡と公州の武寧王陵からは 10 点を越える翡翠勾玉が出土していることが再確認された。慶尚道側の分布図については、資料が膨大であり、作成をすすめている段階である。

表１は、地域ごとに翡翠勾玉の出土数と出現時期をまとめたものである。

まず、京畿道と江原道、済州道を除いて、韓国中・南半部の広い範囲に翡翠勾玉が分布していることが分かる。10 点以上の翡翠勾玉が出土しているのは、釜山、金海、咸安、昌寧、陜川、高霊、慶山、慶州、公州、完州、羅州の各地域である。その中でも、慶州には全体の約 6 割が集中し、際立った分布をみせている。これは、新羅王陵である皇南大塚南墳（40 点）や同北墳（122～127 点）、金冠塚（114 点）、天馬塚（73～76 点）、瑞鳳塚（約 52 点）の冠に着装される形などで大量に副葬されたことが大きな要因である。他にも、慶州の月城路カ 13 号墳（26 点）、林堂洞・造永洞古墳群、福泉洞古墳群、玉田 M4 号墳（34 点）と玉田古墳群、池山洞古墳群のような古墳あるいは古墳群から多数の翡翠勾玉が出土しており、注目される。

出現時期については、福泉洞 80 号墳や 38 号墳がある釜山地域が最も早く、3 世紀後葉～4 世紀前葉に遡る。また、隣接する金海や馬山、晋州においても 4 世紀前半に遡る古墳

表１　韓半島出土翡翠勾玉集計表

道	地域	古墳群（遺跡）数	埋葬施設（遺構）数	点数	出現時期
慶尚南道	釜山	2	14	20	3世紀後葉～4世紀前葉
	金海	6	10	11	4世紀前葉
	梁山	2	2	5	5世紀末葉
	蔚山	2	2	2	6世紀前半
	密陽	1	1	1	4世紀末葉～5世紀前葉頃
	馬山	1	2	2	4世紀前葉頃
	昌原	2	4	5	4世紀後半～5世紀前半
	咸安	3	10	17	5世紀前葉
	固城	2	5	6	5世紀
	泗川	1	1	1	6世紀前葉
	晋州	1	2	4	4世紀第Ⅱ四半期
	河東	1	1	1	6世紀第Ⅱ四半期
	山清	1	1	1	6世紀前半
	昌寧	4	5	14	5世紀中葉
	陜川	2	12	84	5世紀中葉
慶尚北道	高霊	1	8	31	5世紀第Ⅰ～第Ⅱ四半期
	大邱	4	5	7	5世紀中葉
	慶山	2	14	29	4世紀末葉
	慶州	20	44	約532～540	4世紀末葉
	永川	2	4	6	4世紀後半～5世紀前葉頃
	浦項	2	2	2	5～6世紀
	栄州	1	1	1	5世紀末葉
	蔚珍	1	1	1	6世紀中葉頃
忠清北道	清州	1	1	1	5世紀中葉～後葉
忠清南道	天安	1	1	1	4世紀前半～中頃
	瑞山	1	1	1	4～5世紀
全羅北道	公州	4	5	19	5世紀前葉～中葉
	論山	1	1	1	5世紀後半頃（下限）
	完州	1	11	11	4世紀前半
	井邑	1	2	2	6世紀初頭～中葉
全羅南道	霊光	2	2	4	4世紀後半頃
	務安	1	1	1	5世紀後葉～末葉頃
	羅州	3	6	10	5世紀後葉～末葉頃
	霊岩	3	5	5	5世紀中葉～後葉
	海南	2	2	2	5世紀中葉頃
	高興	2	3	3	5世紀前半頃
	順天	1	1	1	5世紀第Ⅳ四半期
	麗水	1	1	1	5世紀後半～6世紀初頭
寺院		3	4	17	
合計		92	198	約863～871	

から翡翠勾玉が出土している。

慶州における最も早い例は月城路カ 13 号墳の 4 世紀末葉で、出現時期が遅れる。したがって、慶州を中心とする新羅においては、5 世紀中葉に位置付けられている皇南大塚南墳から翡翠勾玉の出土数が急激に増加することがあらためて明らかになった。

また、忠清道・全羅道でも、斗井洞遺跡、上雲里遺跡、公州の水村里遺跡、霊光のセト古墳 A 号墓、高興の野幕古墳などから 4 世紀～5 世紀前半頃に遡る資料が出土している。同じく慶山の林堂 G 地区 6 号墳からは 4 世紀末葉、加耶の高霊・池山洞 73 号墳からは 5 世紀前半の資料が出土している。これらは、皇南大塚南墳より古い段階の資料であり、新羅王陵に大量副葬される以前の、翡翠勾玉の流通を考える上で重要な資料であることが明らかになった。

最も新しい段階の資料は、7 世紀に位置付けられる慶州の忠孝里 7 号墳のものである。また、寺院としては、8 世紀中葉頃に位置付けられている佛國寺三層石塔舎利孔から異形丁字頭勾玉が出土している。

（3）日本出土の翡翠勾玉との比較

研究の過程で、半玦形勾玉が重要であることを再認識し、重点的に比較検討を行った。

具体的には、玉田 M4 号墳出土の半玦形勾玉 2 点に、日本の弥生時代における翡翠半玦形勾玉の製作に通有の施溝分割技法が使用されていることを見出した。この資料と類似するものには、韓半島の主に青銅器時代に見られる天河石製勾玉があるが、横断面・縦断面が両面とも弧状にカーブしたものであり、施溝分割技法を使用することによって厚さが一定の平坦面を作り出し活用することができた日本の翡翠半玦形勾玉とは、形態及び製作技術が基本的に異なっている。したがって、玉田 M4 号墳出土の翡翠半玦形勾玉は、型式学的な観点、製作技術の観点からみて、日本列島で製作され、ある時期にもたらされたものと判断した。

玉田 M4 号墳からは、他にも翡翠の丁字頭勾玉や定形勾玉などが出土しており、形態、緑色で透明感のある翡翠の質、穿孔方法のいずれも日本のものによく類似している。韓半島では、丁字頭勾玉は三国時代の主に翡翠勾玉にかぎって認められるだけであり、日本と比べてその出現や出土数の増加が明らかに遅れる。これらのことなどから、丁字頭勾玉や定形勾玉等についても、弥生時代中期中頃から古墳時代中期前半（5 世紀前半）までに製作された日本列島の同時代品または伝世品が流入したもの、あるいは日本列島からの流入品をモデルに製作された可能性が高いものと判断した。

なお、以上のような観察結果や検討成果を論文としてまとめたが、現段階では校正中であるため、５．主な発表論文等の欄には記さなかった。

（4）韓国出土翡翠勾玉の流通過程について

流通過程の解明には、まず原産地が判明していることが前提となる。しかし、１．研究開始当初の背景でも記したように、原産地については未だ解決されていない問題である。科学的産地分析も対照的な結果が出されており、そもそもダブルチェックが実施されていない状況では、飛躍的な成果が望めないだけに、考古学的証明がいっそう重要となる。そこで、集成的研究を基礎に、型式学的な観点、製作技術の観点から検討を行うことに主眼をおいた。その結果、玉田 M4 号墳出土の翡翠半玦形勾玉は、日本の弥生時代に製作されたものであることを明らかにした。翡翠丁字頭勾玉や定形勾玉なども、日本列島から流入したもの、あるいは日本列島からの流入品をモデルに韓半島で製作された可能性の高いものと考えた。

これらのうち、翡翠半玦形勾玉は弥生時代中期～終末期に製作されたものである。翡翠丁字頭勾玉は、弥生時代まで遡るもの、さらには大賀分類にあてはめれば（大賀克彦 2005「稲童古墳群の玉類について－古墳時代中

期後半における玉の伝世－」『稲童古墳群』行橋市教育委員会)、古墳時代前期のタイプと、前期末葉～中期前半にかけてのタイプが認められる。定形勾玉は、古墳時代中期以後に主に見られるタイプの１点を除き、古墳時代前期のタイプが主体である。玉田 M4 号墳の築造が 5 世紀末葉と考えられるのに対し、このように全体的に古い様相を示している。さらに、製作時期の異なる多様な形式・型式が同じ埋葬施設から同時に出土しており、これらの翡翠勾玉がどのような流通過程を経てもたらされたのかが問題となる。

日本列島製のものがもたらされたことを前提とするならば、韓国出土翡翠勾玉の流通過程については、次のように考えることができるであろう。

第１のパターンは、弥生時代中期中頃にあたる紀元前 3～2 世紀頃から、玉田 M4 号墳が築かれた 5 世紀末葉にかけて、製作された順にしたがって日本列島から流入した翡翠勾玉を、玉田古墳群を築いた勢力が入手し、古墳に副葬したと考える場合である。

第 2 のパターンは、初期における韓半島への翡翠勾玉の流通拠点であったと判断される釜山・金海地域においていったん伝世された後、あとから流入してきた翡翠勾玉とともに玉田古墳群を築いた勢力が入手して、古墳に副葬される場合である。

第 3 のパターンは、製作時期の違う翡翠勾玉が日本列島から一括してもたらされ、古墳に副葬されるというものである。これには、玉田古墳群を築いた勢力が直接入手する場合と、新羅王陵を築いた勢力などを介して、二次的に入手される場合が考えられる。

検討の結果、第 3 のパターンが最も妥当なものと判断した。日本列島における流通の主体は、玉田 M4 号墳出土品に丁字頭勾玉が高率で含まれる点から判断すると、古墳から翡翠丁字頭勾玉が豊富に出土している畿内とその周辺地域にあって、入手経路や流通を統制することが可能であった勢力、すなわち倭政権が深く関与したことが考えられる。

韓半島側の流通の主体は、玉田 M4 号墳から新羅系杏葉が出土していること、また冠に着装する形などで大量の翡翠勾玉を保有した新羅王陵築造勢力は入手経路や流通も統制する立場にあったこと、皇南大塚南墳でも翡翠丁字頭勾玉が高率で認められることから、新羅王陵を築いた勢力から二次的に入手した可能性が考えられる。

あるいは、玉田 M4 号墳の出土数は、新羅王族下位の墳墓に相当する慶州の古墳や周辺地域の王陵級の古墳から出土した数をはるかに凌駕する。このように、ほとんど同等の階層に位置付けられる者たちの古墳に不均衡が生じているのは、新羅中枢へ集中的に流入するのとはまた別のルートで、玉田 M4 号墳の被葬者勢力が翡翠勾玉を入手した可能性が考えられるが、結論は出せなかった。

（5）今後の課題・展望

釜山・金海を除く、慶尚道出土資料についても集成票はほとんど完成しており、今後は慶尚道側の分布図の作成をすすめるとともに、何らかの形で成果を公表すべく努力していきたい。

合わせて、既知の資料をできる限り再検討するとともに、情報不足の資料や新規資料については実測図や写真による資料化をすすめ、以後の研究に資するようにしたい。

４（4）で記した翡翠勾玉流通過程のパターンは、韓半島の他の古墳出土資料についてもあてはめて考えることができる。だが、蓄積された資料や新規資料のデータを基礎に、出現時期や出土数の変化などを再度見直し、他に考えられる流通過程はないか引き続き検討することも重要である。また、日本出土資料との比較もさらにすすめることが必要であろう。他の副葬品の流通過程との比較検討も不可欠である。

そして、これらの集成的研究や比較検討作業を基礎に、韓国出土翡翠勾玉の流通過程に関する研究をさらにすすめることによって、日本列島と韓半島における人々の間の通交関係や勢力間の歴史的関係がより具体的になることが期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）

髙橋浩二、韓半島出土翡翠勾玉集成－忠清道・全羅道編－（平成 24～27 年度科学研究費基盤研究（C）研究成果報告書)、2016、50.

６．研究組織

(1)研究代表者

高橋　浩二（TAKAHASHI　KOJI）
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：10322108

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

木島　勉（糸魚川市教育委員会）
朴 天 秀（慶北大学校・人文大学・教授）